



イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費：414千円

バリ島の影絵人形芝居ワヤンレクチャー&パフォーマンス

目的・趣旨

本イベントは、SPACの上演や新作歌舞伎の演目にもなった「マハーバーラタ」を取り上げ、レクチャーとイベントを通して、インドネシアの演劇においてこの物語がどのように用いられているのかを明らかにすることを目的とする。マハーバーラタはインドで紀元前に誕生した古典文学である一方、10世紀にインドネシアに伝播したこの物語は、現代にいたるまでさまざまな創作物語が誕生している。それゆえ現代社会の中に生き続けるマハーバーラタに関する自身の研究成果を、単に論文という形にとどまらず、レクチャーや自身の創作演目のパフォーマンスを通して一般市民に向けて発表をする。

日時・場所

平成30年7月13日から平成30年7月15日
静岡文化芸術大学 自由創造工房（13日）、浜松市鴨江アートセンター（15日）

体制

（実施代表者） 文化政策学部 芸術文化学科 教授 梅田 英春

共催・後援等

（後援） 浜松市

内容

本イベントは大学におけるレクチャー（13日）と、自身のマハーバーラタの創作パフォーマンス（15日）に分けて行った。レクチャーは、どちらかといえばアカデミックな内容を含み、インドにおけるマハーバーラタの歴史、10世紀以降のインドネシアへの伝播、10世紀以降に始まったインドネシア版マハーバーラタ創作物語クカウィンの概要について前半で講義をおこなった。また後半では、翌日実施する人形影絵芝居ワヤンのパフォーマンスについて、鑑賞のプレトークとしてレクチャーを行った。申込者（参加者）の多くは、15日のパフォーマンスにも参加する方が多く、鑑賞の助けになるようなレクチャーを目指した。

15日のパフォーマンスでも上演前に15分ほどのプレトークを実施した上で上演を行った。創作演目「鬼女となった姫」は沖縄の組踊の演目「執心鐘入」を基礎にしつつ、その物語をマハーバーラタに置き換え、更にバリの伝説であるチャロナラン物語（鬼女の物語）を取り入れつつ創作したものである。上演時間は2時間で上演中は舞台の周りを自由に動いて鑑賞する新しい手法をとった。



結果・成果

13日のレクチャーでは、マハーバーラタの研究者、インドネシア芸能の研究者や愛好家、一般市民の聴講（55名）があり、後半の質疑応答では活発な議論が行われた。この一連のレクチャーは、翌日のパフォーマンスに重要な役割を果たしたと考えている。翌日のパフォーマンスの中には「レクチャーを受けたことで、ひじょうに理解できた」という内容の感想が多くそれなりの意味があったと考えている。大学がこうしたイベントを実施する意味は単にパフォーマンスを実施するのではなく、教員の研究の成果としての場でもあり、ライウハウスや劇場では簡単に集客できないことをあえて大学だからこそ行うことに意味があると考えており、特にイベントシンポジウム費で行う意図は達成できたと考えている。翌日のパフォーマンスは、研究者＝実演者である自身の研究のスタンスを社会に公開すること、また芸能研究にとって実演が重要な役割をもつことを、社会に実践した試みでもあった。作品の完成度については課題も残ったが、西洋音楽がその中心に位置づけられる浜松において、アジアの音楽をあえて公立大学から発信する意味は大きいと考えている。浜松はユネスコに認められた音楽都市なのであり西洋音楽を発信する都市ではない。多文化の人々を抱える浜松が発信すべき音楽は何か、という大きな課題をこうしたイベントやパフォーマンスを通して提示したつもりである。

